

可否類



可否道

椰子及六著

北刊



可否道

昭和三十八年八月十一日印刷
昭和三十八年八月十五日発行

定価三三〇円

著者 © 獅子文六

発行者 佐藤亮一

発行所

株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町71
振替東京八〇八番
電話東京(341)七二二一九



乱丁本はおとりかえします

印刷・株式会社 金羊社 製本・神田加藤製本所

Printed in Japan

可
否
道

それもある

モヨ子とか、モヤ子とか、よくまちがわれるのだが、坂井モエ子^{モエ子}が本名である。当人も、その名を好いてる。モエは「燃え」に通じるからだろう。

名前は、覚えにくくても、顔の方なら、皆さん、よくご存じだ。覚えやすい顔である上に、毎夜のように、茶の間のブラウン管に、現われてくる。以前は、人に顔を知られるのは、映画俳優が一番だったが、このころでは、テレビ・タレントである。何しろ、家庭へ侵入してくるから、親しみの度がちがう。それも、坂井モエ子のように、長期の連続ドラマに、よく出演すると、まるで、聴視者の家族の一員のような、待遇を受ける。茶の間の観客というものは、役者の芸の巧さよりも、ナジミの深さで、人気を湧^わすので、彼女のファンは、世間の想像以上に、多いのである。ことに、奥さんとか、おばあさんとか、女性の間に、人気が高いのは、彼女の容貌^{ようぼう}や年齢が、家庭の風教をおび

やかす心配が、少いせいでもあるだろう。そして、彼女の芸風も、大マカで、自然の愛嬌^{あいぎょう}があつて、決して、捨てたものではない。早くいえば、番茶の味であつて、飲み過ぎて、眠れなくなる作用もないから、いよいよ、夜の茶の間向きである。

役柄も、きまつて、中年サラリーマンの細君とか、薬屋のおかみさんとか、好人物のオバサン役で、茶の間の観客は、

「坂井モエ子^{モエ子}って、よっぱど、気のいい女優さんらしいよ」

と、一も二もなく、当人の性格まで、そうと、きめこんでる。しかし、ブラウン管の映像というものは、そう内側まで写すわけではない。

もっとも、当人のモエ子が、毒にも薬にもならぬオバサン役に、飽きてることは、事実である。

「あたし、一度でいいから、思いつきり、悪女の役を、やってみたい……」

と、よく公言するのであるが、どのプロデューサーも、^{あて}対手にしてくれない。

今から二十年ほど前に、彼女が新劇で働いてるころに、「ハムレット」の王妃の役をやったことがあったが、それ

は、彼女が淫^よらで、邪^{よこしま}な王妃の役に向いていたからではなく、若い女優ばかりの中で、肉体的に中ブケのきく女優が、他^{ほか}に一人もいなかったからだ。果たして、王妃が薬屋のおかみさんじみてる、悪評を受けた。

彼女も、見かけほど、好人物でないかも知れないと同時に、毒婦の要素を、どこか、かくしてる女とも、受けとれなかった。

ともかく、毒にも薬にもならぬ役が、得意なだけに、テレビでホーム・ドラマが重用されてる間は、需要が尽きず、なまじなスターより、収入も多いくらいで、その上、世帯持ちがよくて、だいぶ溜^ため込んでるという噂^{うわさ}もある。それで、悪女役がやりたいなぞと、ゼイタクの一つも、いってみたくなるのか。

坂井モエ子——芸名であり、本名でもある。四十三歳。荻窪のアパートに、住んでる。

そのアパートというのが、新築で、冷暖房つきで、間数も三室が標準型だから、中央沿線としては、デラックスの方である。最近、地下鉄が開通したので、そんな投資も、行われたのだろう。

坂井モエ子も、それまでは、吉祥寺に住んでいたのだが、その家を売って、ここへ移ってきたのは、いよいよ商

売繁昌の折柄、交通と生活と、両方の便利を求めたからである。

実際、今までの日本家屋とちがって、諸事、手数が掛らない。朝起きて、寒くない。従って、ストーブに火をつける世話がない。今朝^{けさ}だって、ネグリジェの上に、ガウンを着ただけで、台所仕事ができる。もっとも、毎朝、起きるのは、大い、十時半ごろになってしまいうから、暖房がなくても、世の中は、だいぶ温^{あたた}まつてる。

彼女は、コーヒーをいれ始めた。

新式のガスレンジの上で、湯は、グラグラ煮立ってるし、コーヒーひきの引出しの中には、もう豆が粉になっている。その粉を、彼女は、小さな捕虫アミのようなものの中へ、無雑作にあけた。分量なぞ、計りもしない。しかし、普通よりも、多いような気もした。

ここが、なかなか、微妙な点であって、日本の女が、コーヒーをいれると、どうもマズイのは、粉の分量を、惜しむからだ、いわれている。それは、ケチのせいだというが、濃いコーヒーを怖^{おそ}れる、優しい心のためでもある。どっちにしても、日本の女が、うまくコーヒーをいれるには、もういいと思った分量に、さらに一サジを加えようという、その道の格言があるほどである。

しかし、坂井モエ子は、格言に従う必要がなかった。戦前に、彼女がまだ若い娘だったころから、コーヒーが好きで、喫茶店の常連だったのが、やがて、自分でいれることを覚えた。最初に、自分でいれた時から、タップリと粉を用いた。では、生来、気前のいい方かという、あなたがち、そうでもない。むしろ、ガッチリ屋という評判もある。ただ、コーヒーをいれる場合は、ひどく、気前がいい。いれ損じた時は、惜しげもなく捨てて、新しくいれ直す。

そして、彼女のいれたコーヒーは、まったくウマイ。色といい、味といい、香りといい、絶妙である。そのくせ、彼女は、コーヒー豆や、道具にこらないし、いれ方にも、煩さいことをいわない。ほんとに、無雑作である。まず、生れながらのコーヒーの名手というのであろう。世間も、それを認めている。東京のコーヒー通五人が集まって、可否会というのを結成してるが、彼女は、その同人の一人である。

今朝だって、綿ネルのコシ袋一つが、彼女の道具であつて、まだ、寝足りない、トロンとした眼で、手つきも怪しいのだが、芳香は、たちまち台所にみなぎって、濃くて、しかも透明な液体が、コシ袋の下のカップへ、滴り始めた。白い、厚手のモーニング・カップだが、それが、二

つ、そろえてある。一人ぐらしではないらしい。

「ベンちゃん……」

坂井モエ子は、台所の料理の通し窓から、居間兼食堂に向つて、声をかけた。

「顔、洗った？」

「とっくだよ。もう、仕事始めてんだ」

明るい部屋に、塔之本勉君が、黒いスエーターを着て、お椀型の毛糸の帽子をかぶつて、行儀悪く、イスにのけぞりながら、本を読んでいる。//テアトル・ド・フランス」という、重そうな、大型の本である。

塔之本君は、上品な青年である。乱暴な姿勢で、読書していても、ハシタなく見えない。体は小ガラだが、色が白く、鼻が高く、唇が少し厚ぼったいのは、難といえど難だが、そのために、温厚な印象を増している。そして、眼がやさしく、眉が黒い。女のような顔立ちと、いえないこともないのだが、女にしても、節婦型であつて、一本シンが通つて。それで、品位が生れるのだらう。現代に、沢山ある顔ではなく、昔なら、十万石ぐらゐの殿様にふさわしい造作である。

「おまちとおさま……。おなか、空いた？」

坂井モエ子が、トーストだの、ハム・エッグスなぞを、

遅んできた。

「いいや……」

塔之本君は、舞台写真を食い入るような眼つきで、眺めていて、ロクな返事をしない。それが、また、大変、上品に見える。

「だって、ベンちゃんは、昨夜、あたしが帰ってきた時にも、まだ仕事してて、今朝も、早くから起きて……。おなか、空くわよ」

「それほどでもないんだ」

と、やっと、本から離れたが、モエ子の姿が眼に入ると、

「お早よう」

と、小首をさげた。

「お早よう」

モエ子は、少しあわてた。彼女は、ガサツな性分であつて、日常の礼儀なぞ、忘れがちなのだ。そこへいくと、塔之本君の方は、ブンブン怒ってゐる時でも、アイサツは欠かさない。

「今度のホン（台本）、むつかしいんでしよう」

モエ子は、塔之本君が引き受けた劇団「新潮」のフランス戦後劇のことをいった。塔之本君は、舞台装置家なのである。

「うん、まあね。でも、写真劇やるよりア、ハリアイあるよ。何しろ、数十疋の河馬が、登場する芝居だからね」

「あら、題だけ『河馬』だと思ったら、ほんとに、舞台へ出るの」

「幻影としても、登場人物としてもね。ある河馬は、モーニング・コートを着て、反戦演説をするんだよ」

「新しいわね」

「そういう芝居だから、装置の様式に、一番苦心してるんだ。パリ初演の舞台写真を、参考にはしてるけど、マネはしたくないしね……」

と、彼は、テーブルの上の本を、指さした。

「そう。その言葉、ベンちゃんらしいわよ」

母親が、優等生のわが子を眺めるように、モエ子は、ホレボレとした視線を送った。

やがて、八つちがいの夫婦の朝飯が、始まった。近ごろの夫婦の年齢差は、次第に縮まってきたが、それにしても、良人が年長なのが、常である。しかし、ここの夫婦は、細君の方が八つ上というのは、異例であるが、世情に注意深い人は、姉さん女房の現象が、戦前よりも、大いに増加してるのを、認めるだろう。珍しいといっても、時代おくれの珍しさではない。

「どう？ 今朝の卵、古かない？」

モエ子 がきいた。

「いいや、大丈夫……」

勉君は、もう、食べ始めていた。

「ハム、焼けすぎてない？」

モエ子には、ちょっと、クドいところがあった。芸風からいっても、そういうところが、時々、出るのだが、聴視者の嫌悪を誘うほどではなかった。しかし、年若い良人の身になると、年がら年中のことであるから、うるさくもなってくる。

「大丈夫だってば！」

「そう。それは、よかった……。でも、ペンちゃんは、このころ、前のように、ガミガミいわなくなったから、何か、遠慮してるんじゃないかと、思ってる……」

「遠慮なんかしてないよ」

しかし、ほんとは、勉君も、多少は、遠慮して然るべきなのである。なぜと云って、彼の収入といったら、劇団『新潮』からくる毎月八千円の手当てと、装置を担当した時の特別手当てであって、そのすべては、彼の研究費、材料費、そして小遣錢に宛てられる。生活費の方は、一切合財、モエ子の受持ちである。時には、小遣錢の不足

も、彼女から仰ぐ。いわば彼女の半扶養家族なのだから、あまり威張っては、面白くない。

ところが、モエ子の方では、年若い良人が、精一杯、我儘をいってくれないと、うれしくないのである。それは、自分が年が上だというヒケ目だとか、上品で美男子の良人に、ホれた慾目だとか、そういう風に解釈してもいいが、ビタリと、当てるわけでもない。もっと高尚で、切実な理由も、胸の中に持ってるのである。

勉君は、彼女にとって、化身といえた。純粹で、真実で、最高級の演劇である新劇の化身に、相当した。今でこそ、彼女も、テレビで荒かせぎをしてるけれど、新劇は、彼女の故郷であり、思い切れない恋人なのである。劇団『新潮』の客員として、名義だけでも、籍を置かして貰ってるのも、そのためなのである。

そういう彼女が、『新潮』の中でも、前衛グループに属し、新しい情熱に燃えてる勉君に、尊敬と愛情をささげるのは、当然であった。もし、勉君が、金のもうかる大衆劇や映画の仕事でもやっていたら、彼女は、恐らく、同棲するようなことにはならなかったろう。勉君が、見かけによらず、ガンコな節操を、新劇に立て通してるところが、何とも、うれしくて、たまらないのである。そのために、彼

が貧乏であることも、芸術家らしい我儘勝手をふるまうことも、彼女には、いささかの不満を感じさせないのである。むしろ、彼が貧乏であるほど、我儘であるほど、彼女は満足なのである。勉君と結ばれ、共に生活していると、彼女としては、まだ、新劇とほんとに絶縁してはいないという安心さえ、与えてくれるのである。

だから、たいていのブッチョー面や、無遠慮な言葉には、驚かない。勉君の方でも、他人の目にあまるほど、ズケズケものをいうのが、習慣となつてゐる。

しかし、今朝の勉君は、少し、度を越したのではない。トースト・パンをかじつて、コーヒー・カップに、口をつける、憎らしい口調で、

「まずい！」
と、いった。

モエ子のいれたコーヒーが、人から、まずいといわれたのは、空前のことであつた。

「え？ まずい？」

果たして、モエ子は怒りよりも、驚きの表情になつた。

「うん、まずい、このコーヒー……」

勉君は、あからさまに、宣言した。

「そんなはずないわ。豆だって、いれ方だって、いつも

と、おんなじとおりよ……」

コーヒーの名手が、そういうのだから、信用しなければ

「だって、まずいよ」

「おかしいわ。あたし、そんなこといわれるの、初めてよ」

ほんとに、その通り。東京のコーヒー通の集まりである可否会の連中でも、コーヒーの知識や講釈にかけては、彼女以上の練達者が多いけれど、コーヒーをいれる技術の点になると、断然、彼女がリードした。モエ子さんのコーヒーといえば、テレビ・タレントや、新劇人の間にも、鳴り響いたもので、今、悪口をいった塔之本勉君なぞは、最大の礼讃者だつた。

一体、彼と彼女が結ばれたのは、まだ、彼女が、新劇の舞台に現われた頃に、一度、舞台稽古がおそくなつて、電車がなくなり、彼女の家に泊まつたのが、縁となつたといわれているが、彼女だって、そうムヤミに、男を自分の家に、引き入れるわけのものではない。

それまでに、勉君は、何度、彼女の家を訪れてるか、知れなかった。ほとんど、毎日のように、通つていた。なぜ、勉君が、そんなに、彼女の家へ通つたかという、演

劇の理想を語り合う愉しみもあったが、それにも増して、彼女がもてなすコーヒーの味が、すばらしかったからである。

勉君は、酒を飲まない代わりに、無類のコーヒー好きで、乏しい小遣錢を、どれだけ喫茶店に入れ揚げたか、知れないのだが、舌はなかなか肥えていて、有名なコーヒー専門店へ行っても、そう感心する男ではないのである。

それが、モエ子のコーヒーを、一度飲んだら、飛び上って、喜んでしまった。こんな、うまいコーヒーは、東京じゅう歩いたって、飲めるものではないと、感嘆してしまった。それから、日に一度は、彼女の家を訪れて、コーヒーのご馳走にならないと、生活気分が落ちつかない男になった。彼は、上品な生れつきで、押しかけるとか、押しつけるとかいう所業を、決して、好みはしないのだが、モエ子さんのコーヒーばかりは、抵抗の力を失った。

そして、一夜の縁で、二人は、わりない仲となったのだけれど、モエ子にコーヒーの特技がなかったら、そんな機会が生れたか、どうか。ことによったら、勉君は、彼女のコーヒーにありつくために、結婚したのではないかと、臆測も生れるのである。

それほどに、モエ子の腕前を、信頼してる勉君であるから、ちっとやそつとのことと、細君のコーヒーに、難くせ

つける気にはならないのである。そういえば、この一カ月ばかりの間に、コーヒーの味が、ほんの少しばかり、水っぽかったり、香気が落ちたりしたことが、ないでもなかったが、それと、口に出している気には、ならなかったのである。

しかし、今朝のコーヒーは、断然、まずい。香氣も、風味も、乏しいばかりか、芋の焦げたような、悪臭さえある。色だって、濁りがある。

「こんなもの、飲まないよ」

勉君は、コーヒー茶碗を、遠ざけた。

それは、年上の女房を持つ若い良人の我儘や、甘ったれた威張り方とも、少しちがっていた。やはり、細君のコーヒーに対する最高の鑑賞家として、厳正な態度を示した、というべきであらう。

そういわれると、モエ子の方でも、少し、自信がなくなってきた。手を抜いた覚えはなくても、コシ袋の中に、何か、イヤな臭いのするものでも、飛び込んだのかとも、思った。コーヒーのコシ袋は、乾かすと、異臭が出るので、いつも、水の中に浸してあるのだが、その中に、洗剤の泡でも入ったのか――

彼女は、自分のカップに、口をつけてみた。

「あら、ほんと！ほんとに、まずい……」

彼女は、小首を傾けた。そのように、彼女は、勉君に対しては、決して、強情な妻ではなかった。

「ね、まずいだらう」

「どうしたんだらう、ほんとに……」

彼女は、舌の上で、そのまずさを、研究していた。異臭物の入ったまずさとも、ちがっている。初心者が、悪い豆を、悪い手順で、入れた時のような味だった。つまり、芋の焦げたような臭いと、味だった。

「おかしいわね。もう一度、いれ直してくるわ」

と、モエ子がちち上がらうとするのを、

「待ち給え」

と、勉君が止めた。

コーヒーを入れる時には、その日の天候——つまり温度や湿度が、強く支配するばかりでなく、器具が陶器でなく、金属の場合は、そのカナ気だの、コシ袋の布臭だの、いちいち響いてくるほど、微妙なものである。しかも、そういうことに、最大の注意を払っても、まだ、思うような味が、出ないこともある。

心理！

コーヒーのいれ手の気持ちまで、味を支配するのだから、

ら、かなわない。

「君、ちょっと、聞くがね……」

勉君の声が、急に、詰問的になった。

「君は丹野アンナのことを、考えてたな」

すると、モエ子の顔が、朝日のように、赤くなった。

丹野アンナというのは、まだ、年若い女性であって、劇団「新潮」の研究生である。もともと、研究生のうちでは、古株の方で、来年あたりは、劇団員に昇格するだらう。本名は、丹野安子というのだが、誰もヤスコと呼ぶ者がなく、アンコ、アンコといわれてるうちに、彼女は、奮然として、アンナという芸名を、名乗ってしまった。丹野アンナ、いい芸名である。しかし、混血児でも何でもなし。

アンナは、人好きのする性格で、摩擦の多い劇団生活の中でも、争いを起したことはなかった。でも、どちらかといえば、男性の劇団員の間で評判がよく、先輩の女優たちに、憎まれるというほどではなくても、少し、軽んじられる傾きがあった。

「あの子、少し、イカれてるんじゃない？」

そういう風に、いわれるのである。

アンナは関西生れで、新劇熱に浮かされてから、東京の

伯母のもとに身を寄せるようになったので、言葉のどこかに、あちらのナマリがある。勿論、研究生といえども、役者の卵であつて、その卵のうちから、テレビ局では、遠慮なく（というより、出演料が安いので）手をのばすのであるが、そういう場合に、彼女は、立派に標準語を使いこなす。聴視者には、彼女の関西ナマリは気がつかないだろう。でも、どこか、甘ったるい、舌足らずな調子は、耳に残る。そこが、かえつて、彼女の魅力となつて、研究生としては、テレビの売れ口のいい方なのだが、そういうことも、先輩の女優には、好感を持たれない。

といつて、それも、知れたものである。嫉妬（よこしま）だなんて、程度のものではない。何しろ、まだ研究生であつて、位置が低い。誰に向つても、先生、先生と、呼ばねばならぬ身分である。その上、生来の楽道家というのか、いつも、下ぶくれの顔を、ニコニコさせながら、甘ったれた関西ナマリで、話しかける。彼女の怒（おど）つたところを、誰も見たことがない。喫茶店でも、ビヤ・ホールでも、誘われて、イヤといつたことがない。

まず「可愛い女」なのである。顔だつて、美人とはいえないまでも、あどけない色っぽさがあり、体の均勢も悪くない。好感のもてる肉体というのは、女優として、有利

な条件である。

ただ、唯一の難点（美点のことかも知れない）は、新劇が好きで、好きでたまらないことである。好きというより、狐とか、犬神とかいうものにツカれた状態であつて、一つの物狂いである。新劇のためなら、何をささげても悔いない。すでに、彼女は、両親の愛も、世間の幸福の機会も、新劇のために捨て去つた——と、信じている。自分を、新劇の殉教者と思つて、その誇りに生きてゐる。ブレヒトとか、ヨネスコとかいう人の本ばかり読んで、週刊雑誌は、一度も買ったことがない。

そこが、塔之本勉君の眼にとまつたのである。こんな優秀な研究生は、見たことがないし、ことによつたら、大女優の卵ではないかと、信ずるに至つた。

勉君は、役者ではなくても、劇団員であるから、赤坂の檜町にある「新潮」の稽古場へ、よく姿を現わすのであるが、いつも、ムツツリして、仕事の話の外は、口をきかなかつた。

彼は、決して、厭（いと）み的な性格ではないのだが、早くいうと、劇団の空氣が、氣に入らないのである。

この劇団は、数人の幹部俳優が中心となつて、運営されているのだが、どれも、新劇三十年の経歴の所有者であつ

て、技術の点では水準を抜いていても、もう五十を越したジイさんバアさんであるから、理想だの、情熱だのに、カッカと燃え上る連中ではない。彼等とても、三十年前には、カッカと燃え上ったことがあるだけに、そういう所業を、何か、幼稚なものと考える傾向がある。

のみならず、劇団経営の上からいっても、難解な内外の新戯曲ばかり演じていては、入場者が少くて、ソロバンがとれない。といって、新劇団のカンバンがあるから、時には、今度、勉君が装置を担当しているフランス前衛劇の『河馬』のようなものも、上演しなければならぬが、幹部連中は、そういうものには、出演しない。中堅から若手の役者は、まだ、カッカと燃えてる最中であるから、待ってました、とハリきるのである。

それを見てもわかる通り、劇団『新潮』は、二つの潮流に分かれているのである。いってみれば、旧潮と新潮が渦まいてるのだが、何といっても、勢力を握っているのは、旧潮の方である。彼等は、技術の点で、世間の信用を博してるばかりでなく、経営権を持ってるのだから強い。劇団の空気は、どうしても、彼等に支配されるのである。

その空気が、勉君には、何ともやりきれない。勉君は、実にガンコな、新劇精神の遵奉者であるから、プロ気取り

の幹部連中の態度が、不潔でならないのである。従って、稽古場へくると、ダンマリになるが、中堅や若手の役者たちと、一歩外へ出ると、人がちがったように、快活になり、オシャベリになる。喫茶店とか、おでん屋のようなところで、酒も飲まずに、大気焔をあげるのである。

その気焔に、すっかり共鳴したのが、丹野アンナなのである。研究生だって、劇団員のお供をして、お茶ぐらい飲みに行くのだが、大がい、小さくなって、先輩の意見を傾聴しているのに、彼女は、大胆な発言をした。

「まあ、ベンちゃん、すてき！」

勉君の劇団内の通り名は、『ベンちゃん』であるが、その名で呼びかけるのは、彼の先輩か同輩である。まだ、研究生のチンピラのくせにアンナが口をすべらせたのである。しかし、そのいい方が、いかにも率直である上に、もちまへの関西ナマリも手伝って、一向、ナマイキに聞えなかった。それで、皆の者が、ドッと笑った。それにも隠せず、彼女は勉君に負けない熱弁で、演劇の理想を叫び始めたのである。

それが、今から、ざっと一年前の話なのだが、勉君は、丹野アンナに興味をいだき、お茶に誘ったり、自宅に呼んだり度々、二人だけの時間を、もつようになった。

二人だけの時間といっても、早合点はこまるのであつて、話といえ、いつも、演劇談であるし、また、勉君の態度は、戦前の教師のように、高圧的であり、アンナも、研究生らしい腰の低さで、色っぽいムードの湧くには、遠い間隔だった。

どうやら、勉君は、自分が舞台装置家という職分を忘れ、前途ありげな女優の卵を、一羽の美しい牝鶏めんどりに育てあげる大望を、起したかと、思われた。

「ねえ、君、テレビなんか、出ちゃダメだよ。演技の基礎もできてないのに……」

「ええ、でも、出演しながら、そういうもの身につけると、できないでしようか」

「ダメ、ダメ。君たち——ことに君は、純白なんだ。シミ一つつけても、惜しいよ。坂井モエ子みたいに、シミだらけになっちゃ、おしまいだ」

勉君は、自分の細君のことを、頭ごなしにした。

「そうね、坂井さんは、通俗ね」

アンナも、勉君とモエ子の関係を、忘れたようなことを、口にした。

「だから、テレビなぞ、出ちゃいかん。君が、将来、〃新潮〃の舞台で売り出すようになって、出ちゃいかん」

「はい、そうします」

二人の会話といったら、いつも、そんなところである。しかし、仲間の評判は、どうも先きくぐりをする。

「ベンちゃん、いやに、若いところへ、眼をつけたね」

「あいつ、おばあちゃんと暮らしてるから、どうしても、青い果実に、手が出るんだよ」

青い果実なんていっても、アンナは十九にもなるのだが、研究生という身分が、年若く感じさせるのだろう。

マジメで、ガンコな勉君と、甘ったるくて、ツミのないアンナとの取り合せは、面白いと見えて、とかく、仲間の口の端はに上った。それに劇団〃新潮〃は、とかく劇団員同士の恋愛と結婚が多いので、自給自足劇団とか、共食い劇団とか、異名を持つるのである。稽古場からの帰りに、どうも、あの二人は、一緒に姿を消すようだと、人の噂を立て、半年もすると、結婚披露の案内状が、舞いこんでくるといのが、例であった。

もっとも、勉君の場合は、レッキとした細君があるので、そう簡単に、案内状も出せないだろうが、それだけに、ことの納まりに興味が多いらしく、かえって、噂は高くなつた。

それが、坂井モエ子の耳に入つたのである。テレビ局の

出演者控室には、彼女のような、専門のタレントばかりではなく、荒かせぎの新劇役者も、大勢出入するのである。

坂井モエ子は、良人と若い女性の噂を聞いても、

「あら、そう。ベンちゃん、なかなか、やるわね」

と、他人事のようなことをいった。

それを、マケオシミといって、いえないことはないだろう。彼女だって、勉君が良人の貞操を守って、他の女には眼もくれない方が、うれしにきまっている。

でも、彼らは、ちょっと、風変りな夫婦なので、細君がだいぶ年上であるし、良人は、半扶養家族である点も、世間とちがってるが、二人とも、芸術の世界に住んでることも、考えねばならない。反俗ということが、大切にされるこの世界では、ものの考え方も、世間とちがうのである。

べつに、その約束を交わしたわけではないが、最初から、二人は、自由な夫婦のつもりだった。儲老同穴だとか、一心同体とかいうことは、てんで考えなかった。二人が一緒にいるのは、愛情の継続してる期間内で、その油が切れれば、関係も切れるのが当然であり、また、継続してはならぬものと、考えていた。従って、ヤキモチということは、愚行であり、ひどく通俗的でもあった。

そういうきまりになっているから、モエ子は、噂ぐらい

で、すぐ、髪を逆立てることはできなかった。噂がホントとしても、同じことだった。

「こんなことは、いつか起きると、思っていたわ」

その覚悟は、以前から、持たないことはなかった。ただ、勉君が、十年近い間に、一度も、その覚悟を、用立たせなかっただけのことだ。

その上、彼女は、自分の唇が、飛びぬけて大きいことも、男のようにカン骨の張ってることも、それやこれやで、色気のないオバサン役で、今の位置を獲るに至ったことも、よく知っている。そういう自分が、ヤキモチをやいて、騒ぎ立てたら、世間の人が、どんな風に笑うかも、よく知っていた。

「そうなのよ。だから、ジッと、落ちついて、ベンちゃんの様子を、見るのよ。それで、あの人、ほんとに、その女にホレちまったとなったら、その時は……」

モエ子は、そのように、自分にいつてきかせながら、ちよっと、言葉がつかえた。

その時はどうするか。

彼女の鼻の奥が、ツンと、カラシのきいたホット・ドッグを、食った時のように、痛くなった。

「その時は、呉れてやるわよ。いさぎよく……」